

これまでの「ねっとわあく」を振り返り、気になるテーマを取り上げた号を編集員それぞれが読み返してみました。

今回取り上げたバックナンバーは「あざれあナビ」で読むことができます。



あざれあナビ
ねっとわあくページ

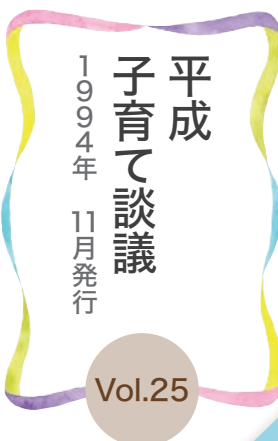
この特集が組まれた前年の1984年に、女性雇用者数が家事専業者数を上回りました。女性のライフサイクルの変化、高学歴化を背景とする社会参加意識の高まり、就業構造の変化などが関係していると思われます。社会は、うつすら見えてきた少子高齢化社会への対策として女性労働力拡大に動き始めました。ただ、当時の主婦の再就職については「子育てが終了し」「家族の生活に合わせて」などの制約が多く、本人の「自己実現のため」や企業の求める像との折り合いが難しいところもあった様子が座談会からうかがえます。企業からは退職の時期の変化について、「結婚でやめる」人が多かったのが「子どもを産むまで勤める」そして「子どもを産んでも勤める」との話が出ています。女性の就労について企業は「継続」と「再就職」の二つの課題に取り組んでいたことがわかります。

一期生たちが今、定年期を迎えています。これまでどのように働き、今どんなことを感じているのでしょうか。その子ども世代、孫世代はそれを見てどのように感じているのでしょうか。時代は、人生100年時代になりました。家族の姿も変化し、人生も働く目的も多様化しています。結婚や出産・子育てなどのライフイベントの影響が大きい女性にとって、正規労働者としての就業の継続は今もハードルが高く、それ故に非正規労働者に女性が多いと指摘されています※。2016年には女性活躍推進法も施行されました。様々なライフスタイルに合わせた働き方を探している道半ばという感じです。世の中の「これは当たり前」もずいぶん変わりました。先輩たちが切り開いてきた道のおかげで、今の私たちの就労上の選択肢が増えている、ということとをあらためて実感できました。

(佐藤みゆき)

※令和3年度男女共同参画白書

20210611 danjogaiyo (shugin.go.jp)



私が男女共同参画に興味を持ったのは「女性は結婚し子育てをすることが幸せ」であると思い、子育てしていたにもかかわらず、女性に押し付けられる母親・妻という役割に、息苦しさを覚えたから。「子育て談議」というタイトルの25号が作成された28年前は、子育てをどのようにとらえていたのでしょうか。1994年は総理府に「男女共同参画室」が設置された年。記事ではこの年に出版された「父子手帖」を紹介しています。令和になった今では、全国の自治体で父子手帳が作成されています。掲載された「父子手帖」は、女性だけでなく父親も育児に参画できる兆しをみせたのではないかと思います。また、当時の子育てを「密室保育」と例えています。それは今でいう「孤育て」。現在は、コロナ禍であり、よりいっそう密室保育・孤育てになっているのではないかと感じています。

当時は今ほどネットが普及しておらず、子育て情報もないため、紙面では、地元の母親達を作る子育て情報誌の紹介もされてきました。今回の「ねっとわあく」の編集員には、当時の子育て情報誌の編集員が二人います。現在子連れでの外食は、気楽にいくことができますが、当時は外食できる店も少なく、ベビーカーで入店できる店を一軒ずつ調べ冊子に載せていた…など、当時の子育て観や編集員としての大変さを「ねっとわあく」の会議の合間に聞き、時代の移り変わりを実感しています。とはいえ、今は多様性の社会。令和4年度版男女共同参画白書によると婚姻件数は、令和3年が戦後最も少なくなっています。子育てや結婚を望まない人も多くいると考えられます。今後、家族の形・幸せの形は時代によって、多様性が増し、変化することが予想されます。古い価値観にとらわれず、次の世代の考えを寛容に受け入れる器を持つてほしいものです。

(其田育子)

創刊
40周年!

編集員が振り返る

「ねっとわあく」気になるテーマ



男女共同
参画社会
基本法入門

1999年

10月発行

Vol.35

1999年6月、男女共同参画社会基本法が公布・施行されました。「ねっとわあく」35号は、この基本法をベースにした特集が組まれています。「大事なことは対等に生きるということ」「男だから」「でも、『女だから』でもなく『私』として生きよう」という見出しからも、

これまでの性別役割に囚われることなく、一人ひとりの個性を認めた上で、制度や慣習を変える動きに積極的に関わっていく、という思いが感じられます。

第6条の家庭生活における活動と他の活動の両立を紹介するページでは、「ねっとわあく流人生ゲーム 男と女のライフステージ」が掲載されています。ライフステージを人生ゲーム風に辿って行きます。スタートは、「恋愛・結婚する・結婚しない」、その後、マスは結婚、子育て、子どもの教育、妻の職業、夫・妻の転職、地域活動、介護と続き、ゴールは老後。結婚を前提として、人生がコース化されていることに気がつきま

す。今、改めてじっくり見ると、違和感があります。結婚をしない選択、子

どもを持たない選択など、人生は多様なのに、そこから外れた人の存在は認められていないかのようです。

そう考えると、現在の「ねっとわあく」は、男女の枠に囚われず、多様な人々の働き方や生き方を取り上げることができるようになりました。数年前には表紙に書かれていた「女と男の情報誌」の表記をやめました。これも時代による社会の小さな変化の一つです。

今後は、まだまだ本気で男女格差の是正に取り組もうとしない国の意識を変えていく必要があります。制度の前に立ちほだかる様々な問題が見えてきたここ最近ですが、県民一人ひとりの意識は、創刊した40年前、そして基本法ができた1999年当時とは確実に変化してきていると感じています。

(國井良子)



探訪・団塊の世代
「仕事で・地域で・家庭で」
「男女共同参画と
団塊の世代を考える」

2005年

3月発行

Vol.46

少子化が加速して久しい日本にも、かつてはベビーブームがありました。第二次世界大戦以降に2回、子どもの出生が一時的に急増する現象が起こりました。1回目は戦後1947年から1949年。この時に誕生した人々を「団塊の世代」と呼びます。大きな塊となり時代が動いたことで、その動向は良くも悪くも大きな影響を及ぼしました。

2回目は「団塊世代」が親となった1971年から1974年。その時に誕生した人々が「団塊ジュニア」です。46号が発行された2005年頃は、「団塊世代」の家庭で育った「団塊ジュニア」が、親になりつつある時代でした。にも関わらず、第3次ベビーブームは起きませんでした。背景に、時代の変化とともに、晩婚化、晩産化、非婚率の高まりなど、結婚観や家族観が多様化したことがあるようです。

46号の10ページに「ジェンダーバイアス度テスト」があります。大げさに誇張してあると思いますが、それらが

常識だった時代があったのか、と考えてしまいます。周囲の感想は「今も、いるいる!こういう人」とか「男女関係なく、やりたいことをすればいい」とか、「ひとつもイエスと思わない」など様々。内容が気になった方は、(あざれあナビで) 46号を読んでみてください。

ジェンダーバイアスとは、社会的に作られた、男女の役割に関する固定的な思い込みで「男らしさ」「女らしさ」に基づく差別・偏見・行動のことです。自分にも思い込みがあるか、テストを試してみても楽しいと思います。

最近では「アンコンシャスバイアス」という言葉を耳にします。無意識に持っている偏見や思い込みのこと、その人の経験や周囲の意見、日常的に接している情報から形成されるといわれます。内閣府男女共同参画局のホームページ(gender.go.jp)に、性別による無意識の思い込みに関する研究や、チェックシートがあり、自分で試すことができます。試すことで新たな発見があるかもしれません。

(望月富美代)

「ねっとわあく」アーカイブ

今年は「ねっとわあく」創刊 40 周年。アーカイブでは創刊号を振り返ります。ティータイムは創刊号のみにあるコラムで、「女らしさとは…」について書かれています。現編集員が、感じたことを綴りました。

ティータイム

女らしさとは……

① ◆日本の女性に期待されている「女らしさ」を端的に表現しているものの一つに歌謡曲があります。毒岳幸子さんの分析によると、女性は「待った」「泣いたり」「耐えたり」しながら恋をし、困難な状況にであうと「弱い女」「バカな女」「女なんだから」と、自分にレンタルを貼り居直ってしまう、単純に言えば、うたの中の女のキーワードは「待つ」事だということです。昔の女じやあるまいし、今の女たちはもつとたくましいという声が聞こえてきそうです。確かにうたのことは、女性の現実をそのまま投影してはいないのですが、ことばは私たちの意識の有様と深くかわっています。たとえば「夫」を何と呼ぶかは、何回もむしかえされた議論ですが、今だに公的な場では「主人」がまかり通っていて、仲間内では「じゅん」などと素敵に言っていた人が、所愛われたちどころに「主人」となってしまう現象は多々あります。

② 厳しくて、台所なんか男の子の入ってくる所じゃないって」といった男が厨房に入るべからずの思想が、「主人」を持つ彼女の中に脈々と生きています。しかし、「主人」というよび名に疑問をもつ人が増えてきているのは、男女のかかわり合いの多様化を反映しているのでしょうか。夫婦げんかの明くる日など、たまには「主人」という呼び方をやめ、「夫」とか「つれあい」とか、ことばを先取りして心に波紋をひろげてみるのも美しいものかもしれません。

③ ◆「女は人間なのか？」などという物騒な疑問を投げかける人がいます。言われてみれば、欧米の言語では「人」を指すことは、同時に「男」をも意味している場合がほとんどです。なるほど、してみると男は人間なのです。しからば女は？ というのは、そう突飛な議論でもないのかもしれない。人の誕生における男と女の分岐点はこの辺にあるのでしょうか。それは受

④ 精後六週間を越えてから、という所まで最近の医学ではわかつているそうです。つまり、そこまでは男でも女でもなく、いわば両性の可能性をもった「人間」という存在だというわけです。しかし、社会の一員として生まれ落ちた瞬間、まず男女が峻別され、その性別によって「らしく」育てられ、女（男）に成長していきます。遊び、ことばづかい、立居振舞い、教育、化粧、服装から職業まで、一口に「文化」と称されるものすべてが「らしさ」の伝統を守り育ててきました。この伝統的な「らしさ」に対し、ある時から女たちは抗議を始めました。「らしさ」の押しつけは「人間」への差別だ、というのがいわゆるウーマン・リブの基本的な主張でした。

⑤ 今、時の流れの中で、一見、男と女の「らしさ」の壁には無数の風穴があきはじめたようです。と同時に、私たちは新たな女らしさ、新たな男らしさの確立という課題を背負ったのではないのでしょうか。

② この言葉を口に出すのは中高年世代以上のように感じています。1990 年あたりから家庭科の授業が男女共通必修になったことも大きいのでは。今も料理が上手な人を『女子力高い』というけれど、料理上手な男性に対しても『女子力高い』と言いませんか？ 女子＝厨房担当！の意識があるからかも。

③ 私は夫のことを「主人」と呼んだことはないです。「パートナー」「夫」とか名前呼びます。夫も私のことを「パートナー」「妻」もしくは名前呼びます。「パートナー」って言うと、年配の方々には評判が良く、新鮮に聞こえるようです。みなさんも是非、使ってみてください。

⑥ 今は、ほとんどの親が、生まれる前の子どもの性別を知る。性別を知った周囲から、「男の子は元気で走り回るから助かるね」というような言葉と一緒に、男の子ならブルー系、女の子ならピンク系の、新生児用品をプレゼントされる。今でも、世間が無意識に、親に「男らしく・女らしく育てること」を、刷り込んでいるのではないだろうか。

⑦ ○〇らしさという言葉自体が、枠に当てはめているように感じる。今は自分らしさを表現する世の中なのかなと。

「ねっとわあく」と社会の40年

大國 田鶴子さん

NPO 法人あざれあ交流会議前代表理事。「ねっとわあく」1号・2号編集長。35～44号までアドバイザーとして再びかわる。

1977年、日本で「国内行動計画」が策定されて、今後10年の、婦人問題の課題・施策を明らかにすることになりました。一連の流れで、静岡県にも1980年、婦人担当の窓口として「婦人対策室」が誕生します。1982年、婦人問題啓発のための冊子発行をするため、県民によりで編集員の募集がありました。

私は、子どもが幼稚園に入って一段落したときだったので応募しました。「ウーマンリブのバイブル」と言われたベティ・フリーダン著の「新しい女性の創造」（1963年アメリカで発行・日本では1965年発行）を以前読んだことがあり、それを参考に応募の作文を書いたのを覚えています。当時は結婚したら仕事を辞めて主婦になるのが当たり前だった時代で、応募してきた60人～70人のほとんどが主婦でした。

結婚前に新聞記者をしていたので、編集長に抜擢されましたが、県の「ねっとわあく」担当の職員も、選ばれた編集員も、「婦人問題」に関してよくわからない者同士で、何度も話し合いをしながら作りました。婦人問題を県民に伝えるために、たくさん勉強もしました。

40年前はまだまだ主婦の多様性は認められておらず、嫁としても意見を言うことができませんでした。特に国内行動計画第1回報告書の重点目標にもある農山漁村に住む女性たちの道はまだまだ開けていませんでした。

第1号では女性だけでレタス栽培を行うグループを取材しました。「男にたよらず、女にだってできるんだ」という気概が彼女たちにはありました。当時の女性たちが地ならしをしてきたことで、女性も意見を言うって良い、結婚後もパートで働いてお金を貯める、自分名義の銀行口座を作る、など今では当たり前になった女性の自立が進みました。

創刊から40年経って、変わったことはたくさんあります。例えば、「婦人」という言葉はなくなり、「主婦」も使わなくなりました。女性の深夜労働禁止が撤廃され働きやすくなり、結婚してからも女性は仕事してお金を稼ぐことが当たり前になりました。専業主婦も少なくなりましたね。

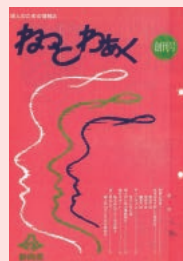
発行当初は県が「ねっとわあく」を作っていましたが、今はあざれあ交流会議に委託され発行を続けています。現在も印刷物としての情報誌を発行していますが、紙で読んだ方が頭に残るし、様々な人に手に取って読んでもらえます。1999年に施行した男女共同参画社会基本法は、「男女平等」という言葉が多く男性議員の反対にあい、「男女共同参画」という言葉に落ち着いた経緯があります。言葉を変えて誤魔化しても、共同と平等は違います。

男女平等、男女共同参画社会を実現するためには「ねっとわあく」がまだまだ必要です。

時間が過ぎて、孫が大人になる頃には男女共同参画社会が実現しているかなと思います。
(聞き手 国井良子)



※ねっとわあくバックナンバーは、あざれあ図書館及びポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。
<https://www.azarea-navi.jp/netwaaku/>



創刊号

1982(昭和57)年
10月発行

①「主人」という言葉から主従関係を連想する。高度経済成長期の家族モデルだった、稼ぎ頭の夫と専業主婦の関係が思い浮かぶ。「主人」や「〇〇さんの奥さん」といった従属的で、誰かに属しているかのような呼び方ではなく、どんな場面でも、いくつになっても、お互いが名前と呼び合える関係を、築けたらいいなあと思う。

④「女は人間なのか？」社会の仕組みは男性を基準に作られている。ねっとわあくは、「婦人問題」を啓発する目的で創刊されたけど、当時「男性問題」はどこにも存在していない。「男性中心社会」の中で、最近やっと、男性相談窓口ができ、男の生きづらさが取り上げられるようになってきた。40年前は、男らしさや男性の生き方を重荷に感じていても、言えない世の中だったのかもね。

⑤「ご主人」と呼ばれるのは、今でも男性が多い。女性は「主婦」と言われるのに対し、最近では「主夫」と意識的に使われているような、性別役割分業が逆転した男性のことを、そう言っているだけのよう。女性は刺身の「つま」でもなければ、主役の「添え物」でもない。男女は対等であると思う。

【全体について】

「女らしさ」って、なんなんでしょう。40年前の記事を読み、時間が止まってしまったような、砂をかんだような、なんともいえない感じです。40年前とな～んにもかわってないじゃないか！ この40年は、なんだったのでしょうか。婦人問題→女性問題→男女共同参画と、言葉だけはしっかりと変わりましたけど。